

# 旭川市「旭橋を語る会」 ふるさとシンボルの話を後世へ

ただ、年月を重ねてきただけの橋ではありません。そこには人々の喜びや悲しみ、そして目を背けてはいけない歴史上の事実があり、そうした話を後世に語り継いでいこうと、市民グループ「旭橋を語る会」では、数々のイベントを企画。ふるさと旭川が誇る旭橋への理解を深める活動をしています。



「旭橋を語る会」  
会長  
関根 正次 さん

に対して、おおよそ730もの橋が架けられているからです。中でも石狩川と朱別川が合流するところには、美しいアーチ型の鉄橋、旭橋が架けられており、旭川市のシンボルとして長年愛され続けています。建設されたのは1932年（昭和7年）といえますから、間もなく80歳になろうというご長寿の橋です。北海道遺産に、また土木学会選奨土木遺産にも指定されており、旭川市民にとって、市内にあるたくさんの橋の中でも特に愛着のある橋です。

北海道三大名橋として札幌の豊平橋、釧路の幣舞橋と並び、旭橋も挙げられますが、架け替えられることなく、当時の姿をそのままに伝えるのは旭橋だけです。その歴史ある旭橋のことを、これからもずっと後世に語り継いでいこうという市民グループ「旭橋を語る会」の活動が広く認められることとなり、国土交通省の平

## 「手づくり郷土(ふるさと)賞」は、 メンバーの大きな励みに

道北の中心都市である旭川市は、“川のまち”とも、“橋のまち”とも呼ばれています。なぜなら石狩川や忠別川など、大小160本もの川が市内を流れ、その川



成21年度『手づくり郷土（ふるさと）賞』に選ばれています。

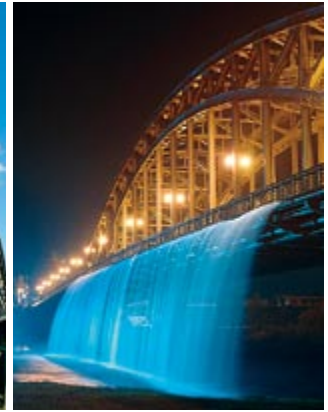
会長の関根正次さんは「私たちの活動は、決して派手なものではなく、地道に取り組んでまいりましたが、こうして賞をいただいたことで、メンバーの大きな励みになりました」と、笑顔がほころびます。

## 当時としては巨費の103万円をかけ、 今生の別れの場にもなった

「旭橋を語る会」は、2005年（平成17年）に、20人ほどの有志で結成され、現在は200人余りの会員を抱えます。フォーラムの開催、旭橋をテーマにした絵画や写真、ちぎり絵などの展示会、旭橋の文字を題材にした書道教室、バスガイドさんへの旭橋に関するレクチャー、周辺の清掃作業、橋の塗り替えに伴い市民と一緒に橋の下塗りを行うなど、活動内容は多彩です。また、関根さん自身が小中学校へ出向き、郷土の橋のことをもっと知ってもらおうと総合学習の時間に講師を務めることもあります。ご自身は高齢者向けの福祉施設で副施設長をし、その施設を利用して展示会を開催することもあります。

「北海道の道路や橋の建設には、当時の樺戸集治監や網走監獄の受刑者が携わり、非常に辛い労働を強いられました。時としてモノのように扱われ、命を落としてまでも完成させたという経緯があり、旭橋も例外ではありません。子供たちには昔、旭橋を作るために、どんなことがあったのかという歴史上の事実を、あえて伝えるようにしています。鉄と鉄をつなぎ合わせるのにも、炭を真っ赤にし加熱したりベットを、橋の上で作業する人が鉄のグローブのようなもので受け止め、1本1本接合させていったそうです。何十万本というから、気の遠くなるような数字です。そうすると子供たちは目を白黒させて耳を傾けるんです。今、こうして便利に使っている旭橋について少しでも理解が深まり、彼らの次の世代にも伝わることでしょう」。

ところで川の氾濫によって、木製の橋が跡形もなく流されてしまうことが珍しくなかった時代。しかし、旭橋だけはビクともしませんでした。旭川には以前、大日本帝国軍の第七師団があり戦車を通ることも織り込み済み。一部にドイツの鉄鋼を使い、コンクリート製の橋なら、2万円に満たなくても出来た時代に、旭橋は破格ともいえる103万円が投じられています。この頑強な橋を渡って戦地に赴いた兵士も相当おり「幼い頃、師団の後ろをついていき出兵するお兄さんを、旭橋で見送ったというお話を年配のメンバーから聞い



様々な表情を見せる旭橋

たことがあり、胸が熱くなりました。ですから、単なる交通手段ではないんです。旭川の人にとって、旭橋は本当に特別な橋であり、数々のドラマが繰り広げられてきました」と話す関根さん。貴重なお話が豊富に綴られた「旭川の橋」（旭川叢書）という本も出版しており、旭橋以外の旭川の橋について造詣の深い方です。

## 頑張りすぎないことが、 活動を長続きさせる秘訣

会を運営するにあたり「ボランティアですから、それぞれの姿勢を尊重しています。最近、時間がけっこうあるだろうと退職された方をあてにしても、健康のためパークゴルフ、別のボランティアにも参加しているなど、お忙しいようです。それでも現役の若い方が“その日は仕事がありますけど、午前中なら大丈夫ですよ」と、快くイベントに顔を出してくれますので、たいへんうまくいっていると思います」と、良好な様子。今後の抱負については、重要文化財への働きかけ、同様に北海道遺産に関連する市民グループとの交流、間もなく80周年記念を迎えるにあたって、より話題性のあるイベントの開催など、いろいろアイデアをお持ちのようです。

「全国各地の橋を見て歩きましたが、同時代の橋で旭橋ほど美しい橋は、ほかにはないと思っています。とにかく、頑張りすぎないで、末永く活動を継続させていきたいですね」と、旭橋への愛情を込めて語ってくださいました。